



公益財団法人 京都新聞社会福祉事業団 活動パンフレット



2025年8月



京都新聞社会福祉事業団の活動

京都新聞社会福祉事業団は、2025年3月18日に設立60周年を迎えました。1965年（昭和40年）3月18日、京都府・滋賀県の地域福祉の発展に寄与することを目的に、京都新聞社が取り組む社会福祉事業を統合し、財団法人として発足しました。

皆さまからお寄せいただいたあたたかいご寄付は、当事業団の福祉活動を通じて、京都府・滋賀県の地域福祉を支える大きな力となっています。

さまざまな事情で学費の捻出が困難な生徒・学生を支援する「愛の奨学金事業」、障害のある方の自立や社会参加を応援する「障害のある人のための事業」、高齢者の生きがいづくりを支援する「高齢者のための事業」、子どもたちの成長と明るい未来を支える「子どものための事業」、子育てに悩むお母さんをサポートする「子育て応援事業」、福祉施設の活動を支援する「福祉活動支援事業」など、地域に根ざした福祉活動に、すべて大切に活用させていただきます。皆さまのご厚意を大切にしながら、これからも「ともに生きる」社会の実現を目指してまいります。

1

奨学金

2～3P

2

障害者

4～9P

3

高齢者

10～11P

4

子ども

12～13P

5

子育て

14～15P

6

福祉活動
支援

16～17P

7

顕彰

18～19P

1

奨学金



◆京都新聞愛の奨学金（贈呈式7月／京都新聞文化ホール）..... 2-3 頁

京都、滋賀に在住する高校生、大学生、専門学校生らを対象に、返済不要の奨学金を支給しています。本事業は、家庭の経済事情などにより学費の捻出が困難な生徒・学生を支援するために、当事業団の発足以来、61年にわたり継続しているものです。

●奨学金は、以下の4つの部門で支給しています。

- ①一般の部（公募） ②交通遺児の部（公募）
- ③定時制・通信制高校生の部（公立高校から推薦）
- ④児童養護施設の高校生への奨学激励金

●支給額は、高校生一人あたり年額9万円、大学生・専門学校生には年額18万円を支給。児童養護施設（京都・滋賀の17施設）に在籍する高校生には奨学激励金として3万円を支給しています。

●2025年度の支給実績

- ①一般の部：209人（計2,808万円） ②交通遺児の部：10人（計162万円）
- ③定時制・通信制高校生の部：11人（計99万円）
- ④児童養護施設の高校生への奨学激励金：141人（計423万円）

合計371人に対し、総額3,492万円を支給しました。

児童養護施設の高校生への奨学激励金（2025年7月28日付 京都新聞朝刊）

京都府、滋賀県にある全ての児童養護施設で暮らす高校生を対象にした京都新聞社会福祉事業団の「奨学激励金」贈呈式が今月5日、京都市中京区の京都新聞社で行われた。「愛の奨学金」他部門受給者と申請者のいない1施設を除く16施設の高校生141人分総額423万円が贈られた。市民や企業、団体などからの「児童養護施設・乳児院等の子どもたちのための寄付」を基に1人3万円を贈っている。

贈呈式には今回初めて、代表生徒が各施設から施設長らとともに出席し、激励金が白石真古人常務理事から直接手渡された＝写真。

白石常務理事は、寄付者からの思いをまとめた応援メッセージを伝え

奨学激励金423万円贈呈

京滋の児童養護施設高校生へ



激励した。同事業団では、奨学生の感謝の気持ちや施設からの寄せ書きなどを寄付者側に伝えており、「寄付者の思いが生徒たちに届き、生徒たちの健やかな成長がまた新たな善意の寄付を生む『思いの循環』が生まれることを通じ、持続可能な福祉社会の形成に貢献していきたい」と合わせて伝えた。出席した施設長らは「寄付者の皆さんの応援が生徒らにも伝わったと思う」と話していた。



2025年度 京都新聞 愛の奨学金 贈呈式

(2025年7月22日付 京都新聞朝刊)



謝辞を述べた安原添菜さんと高梨力麻さん（いずれも5日、京都市中京区）



京都新聞社会福祉事業団の2025年度「京都新聞愛の奨学金」贈呈式が5日、京都市中京区の京

ともに生きる

書・杭迫柏樹

◆ 京都新聞「愛の奨学金」贈呈式 ◆

都新聞社で行われ、物価高騰の厳しい経済状況下、将来への目標と希望を抱いて学ぶ京都府・滋賀県内の学生・生徒計371人に総額3492万円が贈られた。奨学激励金も同日、16児童養護施設の高校生141人が代表生徒らに初めて直接手渡された。

奨学金の内訳は、公募一般の部で高校生106人、大学生・専門学校生103人、交通遺児の部で高校生2人と大学生・専門学校生8人、公立高が推薦した定時制・通信制の部で11人。

公募による一般の部の申請には高校生207人と大学生・専門学校生192人計399人があり、ひとり親家庭が半数を超えた。

大藪俊志・佛教大教授、石川絢嗣・京都青年会議所理事長、横江美佐子・京都市南青少年活動センター所長の選考委員3人が、成績や作文などで将来への思いや現在の学業に対する意欲をくみ選んだ。

贈呈式は3回に分けて開かれ、白石真古人常務理事と寄付者代表らが代表生徒に奨学金を手渡した。常務理事は奨学金の趣旨や選考の経過などを説明。多くの寄付者からの言葉も引用し、「その思いを胸に、夢や目標に向かって歩

「感謝胸に音楽の道精進」

「苦境に負けず頑張る」

371人に3492万円 奨学生に直接手渡し

んでください」と話した。

大藪選考委員長は「多くの善意に支えられた奨学金を有意義に活用してください」と横江委員は「これから先も厳しい状況に直面した時には助けを求めてほしい。助けを求められる人は人を助けられる人、人に手を差し伸べられる人だから」と激励した。

奨学生を代表して2人の学生が謝辞を述べた。京都市立芸術大の安原添菜さんは「音楽を通して世界中の人に勇気や希望を届けられる歌手」を目指して音楽を学んでいる。「さまざまなことに挑戦し、何事にも全力で取り組みたい」とボランティア活動にも励み、昨年は「平和を考える」チャリティコンサートを開催。京都市在住の



代表生徒に奨学金を手渡す白石真古人常務理事

ウクライナの人たちに募金を届け感謝された。今秋には交換留学で英国に渡る予定で、奨学金はその準備の一部にも活用するつもりで「支えてくださる皆さまへの感謝を胸に日々精進してまいります」と結んだ。

舞鶴市出身の高梨力麻さんは、京都市内で一人暮らし。中小企業の支援を行いたい気持ちから税理士を目指して龍谷大で学んでいる。経済的な事情などで通信制高校、短大、4年生大学への編入を経験しており、「皆さんがそれぞれの事情がある中で頑張っていることを、本奨学金の報告で知ることができた。私とは違う境遇に立つ皆さんだと思いますが、私も負けずに頑張ろうと思います」と話し、感謝の思いを伝えた。

同奨学金は、事業団が発足した1965年以来続いている。高校生は年額9万円、大学生・専門学校生は同18万円が返済不要で給付される。奨学激励金は一人3万円が贈られた。（ライター 山本雅章）



◆障害のある人のための事業

障害のある人が社会の一員として自立し、豊かな生活を送るためには、就労支援や文化・スポーツ活動の機会を広げることが重要です。当事業団では、障害のある人の社会参加を促進し、生活の質の向上を図るため、就労支援、体験活動、スポーツ、芸術文化など多岐にわたる事業を展開しています。

◇助成事業

「障害のある人の工賃増へ向けての取り組み」助成（2～3月） 17頁

障害のある人の工賃増を目指す支援事業所などの取り組みを助成 ※2025年度は一時休止

「京都新聞夏季キャンプ・レク活動を応援」助成（6～9月）

障害者団体や支援グループなどが実施する宿泊を伴う、夏季のレクリエーション活動を助成

◇催 事

「京都手話フェスティバル」（2月／京都新聞文化ホール） 5頁

手話の普及と発展を目的に、手話スピーチコンテストや手話アトラクションを実施

シンポジウム「障害のある人の就労支援」（2月／京都新聞文化ホール） 6頁

障害がある人の就労支援について考えるシンポジウム

「みんなで海釣り－障害のある人の体験講座」 7頁

（9月／1泊2日・宮津市 京都府立海洋高等学校 桟橋）

障害のある人の余暇活動の支援をする1泊2日の海釣り体験 神戸新聞厚生事業団と共催で実施

「京都新聞おでかけ公演・障害者団体」（3月で2カ所） 11頁

障害者施設に演奏家らを派遣する出張型公演事業 障害者施設と高齢者施設で開催

◇障害者スポーツ事業 障害のある方々が参加できる多彩なスポーツ事業に取り組んでいます

全京都障害者総合スポーツ大会（6～10月／京都府内各地） 8頁

7競技（卓球バレー・卓球・水泳・陸上競技・アーチェリー・フライングディスク・ボッチャ）を実施

全京都車いす駅伝競走大会・ミニ駅伝競走大会（9月／京都府立丹波自然運動公園）

丹波路を舞台に車いすアスリートが力走する伝統ある駅伝大会

天皇杯 全国車いす駅伝競走大会（3月／国立京都国際会館前－たけびしスタジアム京都）

全国の車いすアスリートが集結する全国規模の駅伝大会

京都ゆとりスポーツの集い（10月／京都市障害者スポーツセンター） 9頁

京都府内の精神科病院やクリニックの患者同士がバドミントン、モルック、スクエアボッチャ、卓球を通じて、交流を図る大会 ※2024年度は、5月にソフトボール大会を開催しました。

パラアーティスティックスイミングフェスティバル 9頁

（10月／京都市障害者スポーツセンター）

障害の有無に関わらず、ともにASを通じて交流し、技術の向上を目指す大会 など

京都手話フェスティバル

(2025年3月17日付 京都新聞朝刊)

ともに生きる

書・杭迫柏樹

◆ 第20回京都手話フェスティバル ◆

聴覚障害者問題への関心を高め、手話スピーチで生き生きと語る機会として「京都手話フェスティバル」が2月23日、京都市中京区の京都新聞文化ホールで開かれた。第20回という節目を記念して特別賞が贈られ、海外でも公演した「ホワイトハンドコーラスNI P PON京都チーム」が元氣いっぱいパフォーマンスを披露した。

京都府聴覚障害者協会と京都新聞社会福祉事業団が主催した。一般の部にはサークルや地域団体などで手話を学ぶ11組、高校生の部には3人が「未来に向けて」などのテーマに沿って、子どもの部は自由テーマで8人が手話でスピーチした。

一般の部で最優秀賞に選ばれた



笑顔で妻に「オハヨー」

手話で語り合う朝

のは英語講師下田奈都子さんだ。英語教室でのコーダと呼ばれるろう者の母をもつ生徒が体験レッスンを1人で受けたエピソードがきっかけで手話を学ぶようになったという下田さんは「私の教室にろう者のお母さんとコーダの子が来たら、全部手話で説明をしたい。お母さんと直接話したい」と目標を語った。

難聴の夫婦とともに手話を習っているという88歳の小野昌有さんは特別賞に輝いた。「朝起きて笑顔

「未来」テーマにスピーチ、交流

でオハヨーと手話で声をかけます。100歳まで元気で習い、いつまでも手話を使って夫婦がなかよくともに暮らしていきたい」とスピーチすると客席からひととき大きな拍手がわいた。

高校生の部で最優秀賞に選ばれた京都八幡高の山下心優さんは、ボランティア活動で子どもと接した体験にもとづいて「将来は作業療法士になり、障害のある人が少しでも過ごしやすい環境づくりをしたい」と夢を伝えた。

この日は「だれにだってお誕生日」「花は咲く」などのレパトリーを、時には客席まで降り立つパフォーマンスや明るく豊かな表情、手や体全体の動きを交えて表現した。

一般の部と高校生の部では他にも次の皆さんが入賞した。

【一般】優秀賞 荻野志穂▽京都新聞社会福祉事業団賞 山花晴喜【高校生】優秀賞 長井優奈。子どもの部の8人には記念品が贈られた。

審査委員長の吉田航・京都府聴覚障害者協会会長は「テーマの『未来』からとても元気をもらった」と講評したうえで、特別賞について「100歳までがんばるという小野さんに負けない気持ちを私たちも抱き続けたい」と敬意をこめてたたえた。

④審査員の林丘寺副住職の天野弘堂さんから特別賞が小野昌有さんに贈られた(京都市中京区・京都新聞文化ホール)

⑤豊かな表現でパフォーマンスしたホワイトハンドコーラスNI P PON京都チーム

シンポジウム障害のある人の就労支援

(2025年3月11日付 京都新聞朝刊)

ともに生きる

書・杭柏樹

◆ シンポジウム 「障害のある人の就労支援」 ◆

障害のある人の就労支援を考えるシンポジウム（京都新聞社会福祉事業団主催）が2月16日、京都市中京区の京都新聞文化ホールで開かれた。障害者雇用をすすめる地元企業の経営者や働く当事者、サポートするネットワーク関係者らが講演し、取り組みが紹介された。家族や支援者も含め約110人が参加、雇用を前にした職場実習の重要性など環境整備や支援機関との連携、現状での課題についても認識を深めた。

初めに白石真古人・同事業団常務理事が「このシンポは、障害者が地域の中でいきいきと働き、普通に暮らしていける『共生社会』の実現を目指して15年前から開催している」とあいさつした。

講演1部では、京都中小企業家同友会理事で、自らも重度と軽度

シンポジウム 障害のある人の就労支援

主催：公益財団法人京都新聞社会福祉事業団 後援：京都市、京都市労働局、京都市障害者就業・生活支援センター、京都中小企業家同友会、協力：GoGoネット京都



参加者からの質問に答える講師の（左から）芳賀さん、渡邊さん、当事者の3人（2月16日、京都市中京区）

の知的障害のある双子の高校生を持つ芳賀久和氏が、その立場を踏まえ、「障害者雇用における中小企業と地域との連携」の題で、雇用や家族支援に取り組んできた経験や思いを話した。

芳賀さんは「同友会は人を企業や地域の中で生かしていくことを考えている。働きにくさを抱えている人たちの働きたいという思い」

昨春高校を卒業して清掃作業に従事する当事者は、午前6時半や7時に仕事の現場に入るには4時半、5時に起きることもあるが、

い、意欲をしつかりと応援していきたい」と話し、具体的な事例も紹介。障害者雇用では「雇用した人とのコミュニケーションの向上、職場全体の離職率が低下した」などの効用もあげた。

2部では職場実習や雇用を積極的に進めている清掃・ビルメンテナンス会社を経営する渡邊真規氏と同社で働く当事者が、職場体験・実習の必要性や経験、環境整備などをテーマに話した。

雇用前の体験・実習の必要性を認識

また職場実習については「職場の人が親身になってくれているのを感じた」と振り返った。実習に関して、終盤の質疑応答で芳賀さんは「企業と当事者をマッチングする場合、雇用を求めているのか、体験しに来ているのかを職場側が見極めることも大切」と言い、渡邊さんは「採用の時には、働く能力というよりも会社に向かうかどうか、他の同僚と合うかどうかを考えることが大切」と指摘した。

さらに渡邊さんは「障害者の能力を生かせる職場とはどういうものか。重度障害者の幸せな社会とは何か。働く事例を増やしていくことで認識を変えていくことが必要では」「企業からのニーズがどれだけあるかわからないが、まず環境整備が必要。労働力がひっ迫している状況は、障害者などいろいろな人が働くチャンスでもある」とうたえている」と続けた。当事者は最後に「社会では障害者として見られることが多いが、可能性のある人と見てほしい。本人の自己肯定感にもつながる」と締めくくった。

（ライター 山本雅章）

職場全体の離職率低下

会社、同僚と合うかどうか

みんなで海釣り-障害のある人の体験講座

(2024年9月23日付 京都新聞朝刊)

ともに生きる

書・杭迫柏樹

◆ みんなで海釣り— 障害のある人の体験講座 ◆

障害のある人たちの余暇活動として開いている「みんなで海釣り—障害のある人の体験講座」(主催・京都新聞社会福祉事業団、神戸新聞厚生事業団)が今年も7、8の両日、宮津市であった。京都、滋賀、兵庫の3府県から介助者と合わせて52人が参加、ボランティアーら124人も加わった。府立海洋高校桟橋では、50名級のチヌに歓声があがるなど、にぎやかに大小の魚を釣り上げ、交流を楽しんだ。

1998年から毎年開かれており、コロナ禍の中断後に昨年再開された。

7日は、府立青少年海洋センター・マリナーシアで開講式が開かれ、海洋高生の講座「海のふしぎについて」もあった。19人の生徒4グループが岩ガキ養殖やプラスチックごみによる海洋汚染、海の



車いすで釣りさおを握る「みんなで海釣り—障害のある人の体験講座」の参加者(宮津市・府立海洋高校桟橋)



釣り針にエサをつけたり釣った魚を網ですくうなど海洋高生も手助けした

環境保護などについて発表した。岩ガキ養殖では、エサもいらず水質を改善するなどのメリットの一方、成長には4、5年かかることや海から揚げて殻まできれいにするには手間がかかるなどの点も伝え、味が良いことを強調した。ヒレに毒があるアイゴも調理の工夫で美味になると発表された。夜には、釣り方や危険な魚の見分け方、救命具のつけ方を学んだ。

8日朝には海洋高で約70人の同高生・教職員やボランティアーが

迎えた。参加者は、夏のような日差しで桟橋で魚釣りに挑戦し、ハタやカマスなどを釣り上げた。同高生と京都府磯釣り連合会や釣り愛好団体の会員らは、釣り針にエサをつけたり釣った魚を網ですくうなど手助けをした。

京都市伏見区から6回目参加の山本勇太さん(19)・新一さん(55)親子は「今日はまた釣れんけど、小学生で初参加した時に大漁だったんで、再現を狙ってよく参加します」と糸を垂らした。

海洋高生手助け、交流にぎやか

3府県から170人超参加 桟橋でトライ、大物に歓声

左京区の畑田めぐみさん(58)は初参加。今回で15、16回目の参加という夫の弘昌志さん(64)は「釣りは自分でも行くけど、この講座はいろんな人との交流が楽しい」とし、「今日は全然釣れんなあ」と言いつつ満足顔。上京区の山岸秀夏さん(18)に付き添った母親の文子さん(42)は昨年に続いて2回目の参加。「子ども同年配の高校生とふれあえるのも楽しい。昨年は初めてで釣れなかったけど、今年はリベンジ」と話し、高校生と一緒にアジやカワハギを釣り上げ「たくさん釣れば家でおかずに」と笑顔を見せた。

右京区から初参加の近藤聖一さん(79)は脳梗塞の後遺症や心臓に不安があり、「以前は大阪湾などにも行ったが病気もあって機会がない。久しぶりの釣りは海も周囲の山の緑もきれいで、気が安らぐ」と釣りさおを握った。

兵庫県三田市の依藤準平さん(42)は、翔太さん(8)を連れ「普段は釣りの機会がなく、昨年初参加し面白かった」と楽しんだ。表彰式では計量と採寸結果に従い上位入賞者に釣りさおなどの賞品が贈られた。

主な協力団体は次の通り。

【後援】京都府、宮津市、宮津市社会福祉協議会、KBS京都【協力】日本釣振興会近畿地区支部・京都府支部、全日本釣り団体協議会、京都府磯釣り連合会、MFG、GFG、京都府漁業協同組合、訪問看護ステーションふおすたあ伏見【協賛】アサヒフーズ、がまかつ、東レ・モノフィラメント、ハヤブサ、マルキユー、マルコ

全京都障害者総合スポーツ大会

(2025年6月30日付 京都新聞朝刊)

「第45回全京都障害者総合スポーツ大会」が22日、京都市北区の島津アリーナ京都で盛大に開幕した。総合開会式のあと、卓球バレー大会が開催され、31チーム241人が参加して熱戦を繰り広げた＝写真。

同大会は、障害のある人たちがスポーツを通じて健康と体力の維持増進を図ることを目的に、京都障害者スポーツ振興会、京都府、京都市、京都新聞社会福祉事業団など9団体が主催している。この日を皮切りに、10月13日までに卓球、水泳、陸上、アーチェリー、ボッチャ、フライングディスクの7競技の大会が府内各地で開かれる。

卓球バレーは、一般、学校、施設の3部門で行われ、施設の部に出場

全京都障害者総合スポーツ大会開幕

卓球バレー集中の熱戦

だより事業団

した洛南Bチーム（南区）の棚橋弘美さん（64）は、「チームのみんなと協力して楽しい雰囲気ですプレーができました。来年はもっと成長して、また参加したい」と話していた。

各部門の優勝は下記の通り。
一般の部＝西陣工房、学校の部＝鳴滝B、施設の部＝西陣工房B



京都ゆとりスポーツの集い

(2024年5月27日付 京都新聞朝刊)



交流と社会参加促進願い 山科でソフトボール大会

精神障害のある人たちがスポーツを通じて交流する「京都ゆとりスポーツの集いソフトボール大会」が17日、京都市山科区の勤修寺公園グラウンドで行われ、約50人が参加した＝写真。

精神科の病院やデイケアに通院、通所している人の健康増進や社会参加促進を願い、府内の精神科病院やクリニックでつくる実行委員会と京都新

聞社会福祉事業団が共催し、44回目。

今回は3チームが参加し、試合を楽しんだ。試合ではホームランが飛び出したり、鋭い打球や難しい打球を好捕する好プレーが続出したりするなど、熱戦が繰り広げられた。ベンチからは選手に声援が送られて試合を盛り上げた。選手たちは試合を通して交流を図った。五月晴れの日差しの



強いなか、選手たちは心地よい汗を流していた。

京都民医連あすかい病院（実行委員会事務局）の福田寛さんは「患者さん同士が体を動かしながら交流する機会となっています。今後も続けていきたい」と話していた。

パラアーティスティックスイミング フェスティバル

(2024年10月14日付 京都新聞朝刊)

障害のある人となない人がともに演技する「パラアーティスティックスイミングフェスティバル」が6日、京都市左京区の市障害者スポーツセンターで行われ、約120人が参加した＝写真。

日本パラアーティスティックスイミング協会などが主催した。今回は



ともに水中の華に

左京



パラアーティスティックスイミング

京都をはじめ、東京や埼玉、石川、愛知、兵庫など8都府県のほか、台湾からの海外チームも参加し、14団体がソロやデュエット、チームなど6種目に分かれ35演技を行った。チームの部では障害のある人となない人が音楽に合わせて列や輪になるなど、さまざまな隊形を演じた。

参加者は日頃の練習の成果を発揮し、華麗な演技を披露した。観覧席からは演技が終わるごとに拍手が送られた。

印象深かった演技に贈られるナイスパフォーマンス賞には、チームⅠの部でSUN&WEEDS：明（石川県）、ソロの部で高田秀一さん（愛知県）、チームⅡの部でマーチボーイズ（東京都）が選ばれた。



◆高齢者のための事業

少子高齢化が進む中、高齢者が安心して暮らせる社会の実現に向けた支援が求められています。当事業団では、高齢者の生活を支えるため、外出機会の創出、介護用車椅子の贈呈、在宅福祉支援など、さまざまな事業を行っています。

◇助成事業

在宅高齢者福祉サービス支援「ホームヘルプサービス活動に関する備品助成」

(12月)

在宅高齢者へのホームヘルプサービスを行う非営利団体に対し、福祉・介護用品の購入費を助成

「高齢者配食サービス支援」贈呈(1月) 10頁

一人暮らしの高齢者世帯に配食を行うボランティアグループや団体におこめ券を贈呈 ※2025年度から休止

「高齢者へのプレゼント」贈呈(2月) 11頁

特別養護老人ホームへ介助用車いすを贈呈

◇催 事

「京都新聞おでかけ公演・高齢者団体」(3月で2カ所) 11頁

高齢者施設に演奏家らを派遣する出張型公演事業 高齢者施設と障害者施設で開催

高齢者配食サービス支援(2025年2月11日付 京都新聞朝刊)



配食ボランティア 32団体におこめ券贈る

京都新聞社会福祉事業団は、1人暮らしのお年寄りや高齢者世帯に食事を届けている京都・滋賀の配食ボランティア32団体に計2700食分の「おこめ券」を贈呈した。

毎年、高齢者事業寄付金や歳末ふれあい募金の一部をもとに実施。本年度は京都市内5、京都府内12、滋賀県内15の計32団体に419食分(高齢者1人当たり1食150グラ

ム相当)のおこめ券を配食に役立ててもらった。

京都市北区の京都生協「くらしの助け合いの会」配食グループは6日、同区のきぬがさ会館で12人がおこめ券で購入した米を炊き上げ、サバの塩焼きやだし巻き、ホウレンソウとシメジのかつお和え、だんごいちごジャムのせなどを添えた弁当110食＝写真＝を、1



人暮らしの高齢者らに届けた。

同会は生協の組合員がボランティアで活動し、配食グループは週1回、高齢者の見守りを兼ねた配食活動を行っている。代表の東山敏子さん(85)は「お米が値上がりしている中での支援はとても助かります」と話した。

高齢者へプレゼント

(2025年3月11日付 京都新聞朝刊)

京都新聞社会福祉事業団は、「高齢者へのプレゼント事業」として京都府、滋賀県内の特別養護老人ホーム7施設に介助用車いすを各1台贈呈した＝写真。2008年度から毎年実施し、贈呈数は299台となった。

企業や団体からの本紙「記念日おめでとうコーナー」や高齢者事業協賛寄付金などを原資にしている。

背もたれと座面角度が調整できるティルト・リクライニング介助型と、ひじ置きと脚部が動かせる多機能介助型の2種類から選択。

特別養護老人ホームすばる醍醐(京都市伏見区)は前者を選び、白石真古人・同事業団常務理事が入居者の試乗に寄り添った。吉野鍾八施設長(59)は「離床機会が増え、座

京滋の特養へ車いす贈る
計7台、メリハリある生活後押し
だより事業団



位保持が困難な方にもメリハリのある生活をしてもらえる。不足していたので助かります」と話した。

他の贈呈先は次の通り。

鳥羽ホーム(南区)、まどかⅡ番館(伏見区)、マ・ルート(宮津市)、南天(大津市)、あじさいの郷(長浜市)、えんゆうの郷(草津市)

京都新聞おでかけ公演

(2025年3月31日付 京都新聞朝刊)

プロのデュオ演奏に手拍子

草津の事業所で「おでかけ公演」



京都府、滋賀県内の障害のある人や高齢者の施設や団体などを訪ね、楽しいひと時を過ごしてもらう「おでかけ公演」(京都新聞社会福祉事業団主催)が、このほど草津市の社会福祉法人こなんSSNシェスタで行われた＝写真。

外出がしにくい人たちのためにと、2006年度から演奏会などの催しをプレゼントしている。本年度は、障害のある人と高齢者の各2団体で実施された。

同事業は、本紙掲載の「善意の小箱」や企業・団体からの「記念日おめでとうコーナー」などへの寄付金を基にし

ている。

公演は、京都フィルハーモニー室内合奏団に所属するバイオリンリストの森本



真裕美さんとファゴット奏者の田中裕美子さんによるデュオ演奏会。クラシックの名曲や童謡など11曲が披露され、施設を利用する障害のある人たちが、演奏に合わせて知っている曲を口ずさんだり、手拍子をとったりして楽しんだ。施設長の田中悦代さんは「利用者の皆さんとプロの演奏が聞ける機会がないので、すてきな時間が過ごせました」と話した。



◆子どものための事業

子どもたちの健全な成長と明るい未来を支えるため、当事業団では多彩な活動を展開しています。児童養護施設へのレクリエーション支援や卒業お祝い金の贈呈、交通遺児への支援、親子で楽しめる子どもシアターの開催など、子どもたち一人ひとりの笑顔と希望を育む取り組みを行っています。これらの活動を通じて、子どもたちが安心して学び、遊び、成長できる環境づくりに努めています。

◇助成事業

「児童養護施設の子どもたちのレクリエーション」助成（9月～翌年3月）..... 12頁

京都・滋賀の全児童養護施設に対し、レクリエーション活動を助成

「児童養護施設の子どもたちへの卒業お祝い金」贈呈（3月）..... 13頁

中学・高校の卒業とともに京滋の児童養護施設を巣立つ子どもたちに「卒業祝い金」を贈呈

「交通遺児の子どもたちへの卒業お祝い金」贈呈（3月）..... 13頁

交通遺児で小学校・中学・高校を卒業する子どもたちに「卒業祝い」として図書カードを贈呈

◇催 事

「京都新聞お楽しみ子どもシアター in 京都/in 滋賀」（8月）..... 13頁

京都・滋賀で人形劇などの公演を開催し、子どもたちを招待

児童養護施設レクリエーション（2025年4月22日付 京都新聞朝刊）

だより事業団 「あいすづくりがたのしかった。またいきたいです」。京都新聞社会福祉事業団が2024年度に実施した「児童養護施設レクリエーション」に参加した子どもたちから感謝の気持ちの寄せ書きや思い出をつづった作文などが届いた＝写真。

同事業は、京都、滋賀の全17児童養護施設に暮らす子どもを対象に1人2700円と引率費用1施設2万円を助成し、24年度は585人の子どもたちが参加した。



児童養護施設レク助成感謝の声届く

守山学園（滋賀県守山市）では、6グループに分かれて行き先を計画。高校生と小学生の女子のグループは自然の中にあるテーマパークに訪れ、頭脳や身体を使ってミッションを攻略しながらすすむ巨大迷路に挑戦したり、アイス作り体験や動物にふれあう旅行を楽しんだという。引率した職員は「子どもたちのたくさんの笑顔を見ることができ、成長を感じることができた」と感謝した。

同助成は、京都ゴルフ倶楽部（京都市北区）主催の「児童養護施設の子どもたちのために」と開催されているチャリティーゴルフ大会の参加者や企業からの寄付を主に、チャリティーコンサートや個人からの寄付金を活用している。

児童養護施設の子どもたちへの卒業お祝い金
交通遺児の子どもたちへの卒業お祝い金
(2025年3月11日付 京都新聞朝刊)



卒業シーズンを迎え、京都新聞社会福祉事業団は、京都府、滋賀県内の16の児童養護施設を巣立つ中学生4人、高校生59人に「卒業お祝い金」として総額244万円を贈った。

お祝い金は「児童養護施設の子どもたちのために」と寄せられた善意をもとに、中学生に1人2万円、高校生に同4万円を贈呈している。高校生5人が卒業する京都市伏見区の桃山学園（畑段隆浩園長）では、同事業団の白石真古人常務理事が、代表の2人にお祝い金を手渡した一写真。

卒業生は「将来、イラストやアニメ関係の仕事をする目標に向け、まずは就職が決まった会社でがんばりたい」「興味がある資産運用を扱う企業に就

16児童養護施設、巣立ちに「お祝い金」



職できた。新生活に必要なものに活用したい」などと夢や希望を語った。

京滋の交通遺児に「卒業お祝い」として、図書カードを小学生7人（1人5千円分）、中学生9人（同7千円分）、高校生11人（同1万円分）の計27人に京都府や京都市、おりづる会（滋賀県）を通じて届けた。交通遺児のために寄せられた寄付を活用している。

京都新聞お楽しみ子どもシアター

(2024年8月13日付 京都新聞朝刊)

人形劇の世界 子ら夢中

北区でお楽しみシアター

京都と滋賀の子どもたちを招待する「京都新聞お楽しみ子どもシアター in 京都」が12人形劇に親しんだ。京



海の生き物たちを演じる人形劇団京芸の団員（京都市北区・市北文化会館）

京都新聞社会福祉事業団が主催する恒例イベントで、児童養護施設の子どもたちも招き、紙芝居や劇を上演している。今回は近畿を中心に全国で活動する「人形劇団京芸」（宇治市）の団員3人が出演し、乳幼児向けの作品2本を披露した。

海を舞台にした物語「うみぼうやとうみぼうす」では、スチールパンの音楽に乗せてさまざまな生き物がステージ上を所狭しと動き回り、子どもたちは団員のコミカルな動作を見てはしゃいでいた。娘の知歩ちゃん（2）と訪れた京都市北区の土田友実さん36は、「（娘は）テレビの人形劇が好きなので生で見せてあげたいと思っていて。イルカが泳ぎ回るのが楽しそうだった」と話した。（浜田大地）



◆子育て応援事業

子どもたちの健やかな成長と、子育て中の保護者を支えるため、当事業団では二つの助成事業を実施しています。

◇助成事業

「子育て仲間を応援」助成（7月） 15頁

子育て中の保護者が交流し支え合うサークルや支援グループを対象に、1団体2万円を助成。2024年度は80団体に総額160万円を贈呈しました。2005年度に開始以来、情報交換や交流の場を支援しており、少人数グループにも助成する独自の制度として好評を得ています。

「子育て事業助成」助成（7月） 15頁

京都・滋賀で子育て支援を行う非営利団体を対象に、講演会や学習会、イベントなどの事業に対し、1団体あたり15万円を上限に助成。2024年度は17団体から応募があり、子ども向けキャンプや文化体験事業、お話会や音楽会、親子で楽しむゲーム、映画上映会、人形劇など、計13事業に83万8000円を助成しました。



子育て仲間を応援助成・子育て事業助成

(2025年5月26日付 京都新聞朝刊)

ともに生きる

書・杭泊柏樹

子育て応援事業

京都新聞社会福祉事業団は毎年、京都府、滋賀県で工夫を凝らして子育てに取り組むグループに助成する「子育て仲間を応援」と、催しなどを支える「子育て事業助成」を行っている。2024年度はこんな支援を行った。

京都市南区を拠点に活動する団体「空き家バンク京都子ども食堂」は昨年8月、京都市下京区の「ひと・まち交流館京都」で、文化体験事業として京都フィルハーモニー室内合奏団のメンバーを招いたコンサートを開いた。「子育て事業助成」は会場費や出演者費用などの一部に充てられ、未就園児や小学生の親子など約1000人が参加し、昼食弁当も配布した。

担当した井上久美さん(40)は



「私たちは普段は食を中心にした子育て支援活動を行っています。が、今回はプロの演奏を聴き、バイオリンなどの楽器にも触れられることができる貴重な体験でした。このような支援が得られれば、親子で楽しんでもらえ、豊かな経験となるような事業を、続けてい

という舞台で、約70人が鑑賞した。メンバーの一人、大谷智子さん(54)は「助成支援金は会場費やチラシ費用、出演など協力を受けたグループの謝金などに役立った。母親も楽しめる舞台となり、リフレッシュできた」との声が多く寄せられた。今後も機会があれば

きたい」と今後への抱負を抱いている。

子どもを対象に音楽や美術で次世代育成活動を行っている京田辺市のグループ「family arm」は、昨年12月、同市内で幼児から小学生など子育て中の親子を対象にした「親子deミュージカル」を開いた。生で歌や楽器演奏を

京田辺市内で開かれた舞台「親子deミュージカル」に、鑑賞した親子も大喜びだった(2024年12月)

提供

親子で音楽に親しむ 充実した催しの一助に

育児中のリフレッシュにも 今年度申請30日まで

同ような舞台を企画したい」と話している。

「仲間を応援」助成を受けた団体「梅津・北梅津地域子育てサロン」は、右京区の梅津児童館と梅津北児童館を会場に、幼児と母親の心身のリフレッシュと楽しみを目的にした催し「ちよつと来てみませんか」を隔月で合計6回開いた。代表の梅谷理江さん(46)は「助成金はチラシやポスター制作費と講師の礼金の一部に充て役立ちました。合計で90人ほど参加していたとき、リズム遊びや体操などで親子ともに心身をほぐしてもらい、笑顔で帰ってもらったことが充実した催しになりました」と手ごたえを語っている。

同じく「仲間を応援」助成を得た京都市伏見区のグループ「ひとつながり」は、代表の酒井美夢さん(40)の家を主な会場に、乳幼児など子育て中の母親を支援する催し「ママの居場所づくり」を月に2回ほど合計20回余り開き、延べ約90人が参加した。酒井さんは「私自身も母親の立場でうちとけて、おしゃべりしながら互いの思いを共有し、ひと思つづける場所にできたのがよかった。今後も継続していきたい」と言う。

24年度は「子育て仲間を応援」で80団体(京都市内15、府内34、滋賀県内31)に一律2万円総額160万円を、「子育て事業助成」で15万円を上限に計13事業(市内4、府内4、県内5)に総額83万5千円を助成した。25年度の申請は30日まで受け付けている。



◆福祉活動支援事業

地域福祉の充実を図るため、当事業団では多様な福祉活動を支援しています。

「京都新聞福祉活動支援」助成（2～3月）..... 17頁

京都・滋賀の福祉施設や団体を対象に、「運営支援」と「設備支援」の2部門で助成を行い、地域福祉の向上を目指します。支援対象は、障害のある人、高齢者、子ども、難病患者、生活困窮者の支援に取り組む団体など幅広く、1団体あたり50万円を上限に助成します。選考委員会では、地域福祉への貢献度、事業の推進力、期待される成果などを基準に審査し、助成先を決定します。

2024年度は、京都の企業から「障害のある人たちのために役立ててほしい」と500万円の寄付を受け、障害者団体や当事者団体5団体に各100万円を贈呈する特別枠を設けました。これにより、当初の助成額500万円と合わせ、総額1000万円の助成を実施しました。

★2025年度新規事業★

「オーシャン号（福祉車両）」贈呈事業（募集開始5月・贈呈式9月）

京都の商社（京都市中京区）会長からの個人寄付を受け、福祉団体や施設に福祉車両を贈呈する新規事業を実施します。チェアキャブ（車いす仕様車）、ワゴン車、軽自動車など計8台を「オーシャン号」と命名し、贈呈します。選考委員会で申請団体の財務状況、車両の必要性、利用計画などを厳正に審査し、贈呈先を決定します。プロジェクトの本格始動に先立ち、追加の一台「0号車」の贈呈をしました。



0号車贈呈式 2025年4月22日付 京都新聞朝刊

京都新聞社会福祉事業団は、貿易商社のオーシャン貿易（京都市中京区）の米田多智夫会長（84）から受けた多額の寄付を基に福祉車両を購入し、21日に京都新聞社（同）で1台目の贈呈式を開いた。車両は「オーシャン号」と名付け、京都と滋賀で活動する福祉施設や団体などに寄贈する。米田さんは昨年、地域福祉などに役立ててほしいと供する市洛南障害者福祉会館（同）で送迎などに活用する予定で、前田文男理事長は「利用者の高齢化が進み、各家庭での送り迎えが難しくなる中で非常に助かる」と喜んだ。

個人で5千万円を寄付。同事業団は3千万円で福祉車両など8台を購入する計画だったが、米田さんから追加で車両1台の寄付があり、「0号車」として地元で長く活動する社会福祉法人・京都障害者福祉センター（南区）に贈った。

贈呈式に出席した米田さんは「有効かつ安全に使ってほしい」と願った。同センターはデイサービスを提同事業団は今年、米田さんの名を冠した基金を設立した。車両の寄贈と給付型の奨学金事業に取り組む。残る車両8台の寄贈先は5月上旬から公募する。

（柿木拓洋）

京都新聞社会福祉事業団 障害者福祉の法人に

オーシャン貿易会長の寄付活用 福祉車両 1台目を寄贈



京都障害者福祉センターに寄贈された「オーシャン号」の0号車（京都市中京区・京都新聞社）—撮影・伊藤暢希

障害のある人の工賃増へ向けての取り組み助成

京都新聞福祉活動支援助成

(2025年4月7日付 京都新聞朝刊)



京都新聞社会福祉事業団は、2024年度の「京都新聞福祉活動支援」と障害のある人の「工賃増へ向けての取り組み助成」両事業の贈呈式をこのほど、京都市中京区の京都新聞社で行った。写真。京都、滋賀両府県の福祉施設やボランティアグループなど39団体に総額1200万円を支援した。

福祉活動支援は同事業団の設立60周年を記念し、障害のある人の支援団体や当事者団体を対象に100万円を5団体に助成する特別枠と従来の上限50万円までを助成する運営、設備両部門で申請を受け付けた。特別枠5団体（申請9団体）に計500万円、運営16団体（同21団体）に計255万円、設備7団体（同14団体）に計245万円、計28団体に総額1千万円を助成。高齢者や難病患者、不登校の子どもたちの支援を行う団体の活動費や障害者施設の老朽化した設備品の購入などに支援した。

工賃増助成では、障害のある人の工賃増につながる活動を支援しており、11団体（申請20団体）に計200万円を助成。お菓子などの商品を密閉するシーラー購入や下請け作業の除草に使用する草刈り機、革製品の縫製に使用するミシンの購入などを支援した。

助成団体は、次の通り。

◇京都新聞福祉活動支援

【特別枠】

◇運営 京都市身体障害者団体連合会（京都市中京区）、Refra me（同）

◇設備 からしだねワークス（山科区）、地域活動支援センターいづみ（木津川市）、京都フォーライフ（京都府久御山町）

【運営部門】

障害者芸術推進研究機構（京都市北区）、つるかめ笑顔クラブ（上京区）、京都府網膜色素変性症協会（中京区）、全国パーキンソン病友の会京都府支部（同）、サークルたんぼぼ燦燦会（同）、お客様がいらっし

ともに生きる

京都新聞社会福祉事業団だより

福祉活動支援や工賃増へ 39団体支援

やいました。（下京区）、子ども会・少年団を育てる左京センター（左京区）、ハンド&ネイルケアボランティアチームガンチャー（同）、助けあいグループぽん（東山区）、ジョイント西京視覚障害者ボランティア（西京区）、笑顔を届ける天使たちボランティアキッズ（伏見区）、京都子育てネットワーク（同）、達坂アモーレ子ども食堂（大津市）、香こちkokochi（同）、JAGUARの部屋（草津市）、竜法師村おこしの会にんにん広場（甲賀市）

【設備部門】

Salut（京都市上京区）、障害福祉サービス事業所ちくもう（福知山市）、志津川福祉の園（宇治市）、城陽市の精神保健福祉をすすめる会野の花（城陽市）、城山共同作業所（南丹市）、異才ネットワーク（大津市）、宅老所心（草津市）

◇工賃増へ向けての取り組み助成

就労継続B型事業所つくしハウス（京都市上京区）、うさぎりんご（中京区）、就労継続支援B型事業所カラフルラット（南区）、京都市やましな学園（山科区）、就労支援事業所ひこばえ（右京区）、京都ふれあい工房（伏見区）、ともの家（綾部市）、宇治作業所のびのび（宇治市）、B型支援事業所カイクウM（大津市）、自立就労センターパレット・ミル（栗東市）、自立訓練事業所かけはし・生活介護事業所うらら（高島市）



◆京都新聞福祉賞・福祉奨励賞

(贈呈式1月／京都新聞文化ホール) 19頁

京都府、滋賀県で地域福祉の向上に著しい功績のあった個人または団体に「京都新聞福祉賞」、活動歴10年未満の若い団体に今後の活躍が期待される個人または団体に「京都新聞福祉奨励賞」を贈り顕彰しています。

2023年度までは事業団の単独主催としていましたが、2024年度の設立60周年を機に、京都新聞との連名主催とし、京都新聞グループ全体で支える新たな形で再出発しました。1965年の事業団設立とともに「京都新聞社会福祉功労者表彰」としてスタートし、今年で61年目を迎えます。

福祉賞は個人20万円、団体30万円、奨励賞は個人・団体ともに10万円を贈呈します。推薦は新聞紙面などで公募し、選考委員会により決定します。これまでに個人192件、団体74件の、合計266件（2024年度時点）を表彰しています。2025年度も福祉賞・福祉奨励賞ともに2件程度の贈呈を予定しています。



京都新聞福祉賞・京都新聞福祉奨励賞 贈呈式

(2025年1月27日付 京都新聞朝刊)

「愛の手で子ら支える」

京都新聞福祉・奨励賞贈呈式



京都新聞福祉賞を受賞した篠澤さん(左)

＝京都市中京区・京都新聞文化ホール 撮影・安達雅文

社会福祉の向上に著しい功績のあった個人や団体をたたえる「京都新聞福祉賞」と、福祉の各分野において将来のリーダーとしての

に3団体を選ばれた。1965年に「京都新聞社会福祉功労者表彰」として始まり、主

は、共働きやひとり親家庭、生活保護世帯などの子ども支援に携わる花園教会水族館館長で「NCMジャパン」京都事務所代表の篠澤俊一さん(44)＝右京区＝と、24時間体制で孤独や不安を抱える相談者への傾聴に長年取り組む「京都いのちの電話」(京都市内)。

Philia」(上京区)、ひきこもりや就労の課題解決への支援に当たる「コミュニティ・スペースsacul」(西京区)、不登校の児童・生徒が安心して過ごせる居場所づくりを尽力する「Reframe」(中京区)に贈られた。

式では、同事業団理た」と述べ、賞状を手渡した。

さん、子どもの支援は1年や2年では結果が見えず苦悩もあったと振り返り、「大学生や社会人へと成長していく姿を見ると、彼らの人生に少しでも寄り添うことができた

は1年や2年では結果が見えず苦悩もあったと振り返り、「大学生や社会人へと成長していく姿を見ると、彼らの人生に少しでも寄り添うことができた



公益財団法人 京都新聞社会福祉事業団

京都市中京区烏丸通夷川上ル 京都新聞社内

TEL 075 (241) 6186 / FAX 075 (222) 2515



ホームページ
が新しくなりました



X公式アカウントを
フォローしよう



電子決済による
寄付受付をはじめました